

第三次世界大戦7

沖縄沖航空戦

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

插
画
安
田
忠
幸

目次

プロローグ	11
第一章 価格破壊兵器	20
第二章 ニンジャ	40
第三章 後退	67
第四章 巨大モール	95
第五章 アロハ・スタジアム	121
第六章 水馬陣	149
第七章 ブラックアウト	174
第八章 ペガサス	200
エピローグ	220

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 一佐。ようやく昇進したことで、浮かれ気味。部下には辟易とされている。コードネーム：マウナケア。

〔原田小隊〕

はらだたくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずの ともお
水野智雄 一曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしばらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チエスト。

い い かける
井伊翔 一曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

みどうそうま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ きねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：ポーンズ。

かわにしまさふみ

川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ

由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしょう

小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら

阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま

赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまりひろし

甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田拓海一尉の同期。

〈陸上自衛隊 西部方面普通科連隊 (WaiR)〉

しばひかる

司馬光 二佐。西方普通科連隊付き教官。朝霞で婦人自衛官の教育に当たれば一佐に昇進させてやると言われているのだが……。

〈第一ヘリコプター団〉

むらたもりと

村田護人 三佐。村田家次男。

むらたりんこ

村田凜子 一尉。村田護人の妹。明野で偵察ヘリに乗っていた。

《海上自衛隊》

〔南支派遣艦隊〕

たかとおまさや

高遠雅也 海将補。南支派遣艦隊司令を務める。

そめやしお

染谷俊雄 一佐。首席幕僚。

ばんどうかねと

板東兼人 一佐。"かが"、艦長。

かねさか

兼坂すみれ 二佐。艦隊情報幕僚。

〔第七航空隊〕

ふじわら み さ

藤原美沙 二佐。岩国基地第九一航空隊司令。回転翼パイロットとしてスタートし、後に双発に転じ、海自初のジェットであるU-36Aのライセンスももつ。

〔インド洋派遣艦隊〕

ごみいさみ

五味勇美 海将。連合艦隊司令長官。航空集団司令から、自衛艦隊司令を最後に退官。P-3C乗りで、藤原美沙の父親に鍛えられた。

えがわとしき

江川俊樹 海将補。

たけうちこうすけ

竹内幸輔 二佐。作戦幕僚。

〔ヘリ搭載護衛艦「ほうしょう」〕

いずみ だ せんえい
泉田宣泳 一佐。艦長。

はしぐち はじめ
橋口肇 二佐。副長。

みやぎ あすか
宮城明日香 一尉。気象班長。

〈哨戒機部隊〉

はた の まこと
波多野誠 一佐。AL-1エアボーン哨戒機「ヤマタノオロチ」の
戦術航空士役。テスト・パイロットであると同時に、マサチュ
ーセッツ工科大学で航空工学の博士号を取った変わり者。コー
ルサイン：メデューサ。

たばた づるう
田端悟郎 二佐。「ヤマタノオロチ」機長。

ゆうき みさき
結城美佐紀 一尉。「ヤマタノオロチ」副操縦士。

〈航空自衛隊〉

（二〇二飛行隊）

むらた さきと
村田先斗 二佐。F-35Aに乗る。村田護人、凜子の兄。

〈民間軍事会社〉

おとなしせいじ
音無誠次 営門一佐。〈サイレント・コア〉の元隊長で、今は自衛隊
退役者からなる民間軍事会社を立ち上げてその顧問となってい
る。偶然ハワイに来ていて巻き込まれた。

こぐれりゆうじ
木暮龍慈 元一曹。狙撃手。音無の部下。二〇年前に自衛隊を引退
してからは、北海道でマタギとして暮らしていた。コードネー
ム：ジャッカル。

////// アメリカ //////////////////////////////////////

《アメリカ合衆国大統領行政府》

エリザベス・ケンジントン 大統領。

ケイティ・ヘンドリクセン 國務長官。

コリン・コンラッド 大統領首席補佐官。アマンダ・マクノートンの
上司。

アマンダ・マクノートン 新補佐官。安全保障問題担当次席補佐官から
国家安全保障問題大統領補佐官へ就任。

クインシー・ショー ホワイトハウス広報室長。

〈海軍〉

〔南シナ海派遣部隊〕

マイケル・ゴトー 中佐。南シナ海派遣部隊参謀。三代続く日系人。

〈陸軍〉

〔第25歩兵師団〕

アレク・キング 中将。元の師団長が負傷し、その後役職を引き継いだ黒人陸軍中将。別名：クラッシャー・キング将軍。

〔第25歩兵師団隷下 第4空挺旅団 “スパルタン”〕

クラーク・マッケンジー 中佐。大隊長。

カイル・バタスキー 中尉。第501落下傘歩兵大隊 “ジェロニモ”、本部管理中隊付き偵察小隊を率いる。

トーマス・ワン 曹長。小隊を纏める補佐役。

マサミチ・ドウモト 伍長。

マック・キム 一等兵。韓国系。

ケイコ・ノックス 一等兵。

〔第7エンジニア・ダイブ分遣隊〕

ブルース・イノウエ 大尉。

ジミー・ボラード 伍長。

〈海兵隊〉

セリーヌ・D・タッカー 海軍少将。少将に出世したばかりの女性。

（レジスタンス）

タケル・サトー 少佐。ハワイでルーカス・カトーのバイト先であるガンショップを経営。七〇歳を超えているが、銃の腕は確か。

チヨコ・サトー タケル・サトーの孫娘で、ルーカス・カトーの幼馴染み。

ルーカス・カトー ハワイ大学マノア校で機械工学を学ぶ青年。チヨコとの写真が “アラ・ワイ運河の恋人”として、全世界の注目を浴びる。

中国

《中央弁公庁》

ファンシュエマオ
範学毛 中国共産党中央弁公庁主任。

〔中央巡視組〕

イエンアロン
嚴亜龍 中央巡視組香港警察連絡官。

〔香港警務処〕

シユイユウケン
徐裕堅 高級警司。香港警務処機動部隊を率いる。

リウエイシー
黎慧詩 警長。徐裕堅の秘書兼副官。

ルッホイウイン
陸海栄 香港の学生運動家。学費のために自分から香港警務処にスパイを志願。

〈陸軍〉

ウェイリイシニン
韋立新 少将。

ロンブツワンフェイ
龍鵬飛 少佐。世界の奇襲戦法が専門。日本のアニメオタク。

ソンリー
宋莉 精華大学情報工学科の俊英にして「シャングリラ」の設計者。
龍鵬飛が雇ったハッカー集団にいて、彼と行動をともにしている。

〔第一〇八特別監察旅団〕

ウービン リンカン
武彬 大佐。林剛の元上官。彼をスカウトした。

リンカン
林剛 中佐。

タオ ツ モ
陶子黙 一級軍士長。

〔第一〇一待機旅団〕

イェシュイトン
葉旭東 少将。

トゥツ チイエン
杜子健 大佐。参謀長。

チワンチウオファン
程卓凡 大佐。政治将校。

シイモン
石萌 少佐。元々はハワイ島攻略部隊の情報参謀だったが、負傷した
杜子健大佐より参謀長職を託され作戦参謀兼参謀長代理になる。

チンユイタン
金語堂 大尉。

クウハオ
顧浩 中尉。慎重な性格を見込まれ、金大尉に部下ごと引き抜かれた。

レンシュエチュン
任学軍 曹長。

〈空軍〉

ファンシン
方星 中佐。優秀な戦闘機パイロットだったが、数年前結核に罹り、
それを機会にコクピットを降りていた。

ハオ ス
郝思 中佐。護衛の戦闘機部隊を率いる。

//// シンガポール //////////////////////////////////////

クー・シェンロン 国防大臣。若く野心家で知られる男。

ヤオファンファン
姚芳芳 クー・シェンロン国防大臣の妻。香港人で元民主運動家。

//// ロシア //////////////////////////////////////

ゲンナジ・オルレンコ 空軍中佐。ユラン・リーダー。

//// インド //////////////////////////////////////

マヘシュ・ラセカール 博士。インド人技術者を束ねるエンジニア。
二〇歳で数学の博士号を取得し、二四歳で物理学の博士号を取
った天才科学者。

第三次世界大戦7

沖繩沖航空戦

プロローグ

海南島は、中国大陸からは、まるで南シナ海に零れ落ちる大粒の涙のように見える。だが涙にしては大きい。島と言うにも、あまりに大きく、東西三〇〇キロ、南北に一八〇キロもの広さをもつ。そして、その海南島から更に南東へ三〇〇キロ下ったところに、西沙諸島がある。

ここは古くから周辺各国の係争の地であり、第二次大戦中は日本が支配したが、その戦争が終わった後、台湾やベトナムが入り乱れて争奪戦を繰り広げた。

最後に実力行使で諸島の大部分を奪ったのは、中国だ。ながらくその群島は不毛の地だったが、

やがて万里の長城もかくやという大規模な土木工事が開始され、それぞれの島の沖合に数十隻の作業船が群がり、埋め立て工事がはじまる。この素早い動きに、周辺諸国はもとより、アメリカも為す術がなかった。

岩礁地帯に毛が生えたような島々は、立派な滑走路を備えた軍事要塞に姿を変えたが、米中関係がエスカレーションの階段を上っていく過程で、中国が南シナ海に設けた軍事拠点の全ては、跡形無く破壊された。

ここ西沙諸島においても、二つの島——ウツデーイー島とトリトン島の両基地は、滑走路を除いて

徹底的に破壊された後、日米両軍によって占領された。

海南島寄りのウツデー島は米軍が占領し、海兵隊航空部隊が前線基地として運用していた。

ベトナム寄りのトリトン島は自衛隊が占領し、航空自衛隊が戦闘機部隊を前進させた。海上自衛隊も間借りはしていたが、海自の哨戒機は足が長いので、必ずしもこの基地に離着陸する必要は無く、後方のフィリピン・パラワン島を前線基地として利用していた。

海兵隊の海南島上陸作戦を支援するため、ウツデー島とトリトン島は、日米両海軍艦艇によって嚴重に警備されていた。一度ならず中国軍戦闘機による飽和攻撃を受けたが、それを退け、今も安全を保っている。

だが、フィリピン沖に発生して南シナ海へと進んできた発達性の低気圧のせいで海は荒れ、その

艦艇部隊も次々と沖合から姿を消していた。今、その海南島から目と鼻の先にある二つの前線基地を守っているのは、それぞれの戦闘機と、遙か上空にいる海上自衛隊の哨戒機のみ。

風雨が叩きつける基地に響く戦闘機が立てる爆音は頼もしいが、どんよりと落ち込む水平線に味方艦艇の姿はない。それが心細かった。

過去二十四時間の戦闘に関していえば、アメリカと中国は一勝一敗。ハワイ、オアフ島に上陸してホノルル市街地を占拠した人民解放軍の反攻作戦は失敗に終わったが、海南島を占領した海兵隊は、雲霞うんかの如く殺到した数百機の無人攻撃機の襲来によって、確保した橋頭堡キョウトウボを失っていた。

陸上自衛隊特殊作戦群サイレント・コアの一個小隊を率いる姜彩夏かんあやか三佐は、ポンチヨに身を包み、風を避けようと、弾薬を運んできたパレットを積

み上げた陰に身を潜めていた。

隣では、補給などの膨大な作業を捌くためにト
リトン島基地司令として赴任してきた熊谷幸路空
将補が、港の方角を不安そうに指さしている。

彼は去年、空自を定年退官したばかりでパイロ
ットでも警戒隊上がりでもない。純然たる補給屋
で、昔で言う経理将校である。

米軍は、この島を徹底的に破壊して、何一つ人
工物を残さなかった。例外は滑走路と港湾施設、
また防波堤と船着き場だ。一部のクレーンも無事
なままである。

その港湾施設は、数千トンの補給船が接岸でき
るよう浚渫しゅんせつもされていたが、今はベトナムの漁
船が数隻、避難して停泊していた。数は五隻だが、
まだ増えるらしい。

「変な話だと思わないか？ こんな時化しけの中、漁
もないだろうに。しかもあんな小舟で……」

「明らかに、政治的な意味合いでしょうね」

この海域は、中国とベトナムが激しく領有を争
った。この島も、かつてはベトナムが実効支配し
ていたのだ。

この島を日米両軍で奪還した後、ベトナム軍に
はオプザーバーを上陸させて、小さな旗を立てさ
せてやった。たったそれだけのことで、どちらか
といえば中立だったベトナムが日米両軍に積極的
に加勢し、この戦争が終わった後の島々の帰属に
関しては、ベトナムへの返還が既定路線になりそ
うだ。

ベトナムとしては、それを後押しするために、
わざと漁船団を向かわせているふしがある。日本
側も、補給物資をベトナムから調達し、戦闘機の
領空通過や緊急着陸を要請している手前、強い態
度には出られないという弱みがあった。

「これで終わりですか!？」

姜三佐は叩きつける風雨の中で、怒鳴るような大声で質した。

「いや、最後に、小型の貨物船が入るらしい！ベトナム政府から、われわれへの贈り物を搭載しているそうだ。日本企業が現地で生産してる安全な食料や新鮮な牛乳などだ。さすがにこれは断れない。日本本土から運んだら、フィリピン経由で四〇〇〇キロ近くになる。食料は一番後回しだ。

しかも、一日一便。これがベトナムから調達すれば、僅かに三〇〇キロ。ハーキュリーズ輸送機なら、物資を満載して一時間で一往復できる。この利便性には勝てないよ。ここを経由して、一部はウツデー島の海兵隊に。そこから海南島にも運ばれる予定になっている」

「ベトナムが、海南島攻略の補給を担っているわけですか？」

「非公式にだが、そういうことになるな。アメリカ

カとの関係を進展させる、絶好の機会だと見たんだろう。航空燃料の提供も申し出ているらしい。戦争が長引けば断れないだろう」

「艦隊を飛び立つ時、例の無人機部隊の次のターゲットは沖縄だろうと聞きました。ここが危険だとは思えません」

「念のためだよ、念のため……。一応、鉄砲は一〇〇挺ばかり用意した。警備小隊もいるにはいるが、雑用をこなしつつ、この天候で二四時間の警備は無理だ。やはり陸戦となると、君らが本職だしな。海自は、潜水艦からのコマンド上陸なんて絶対あり得ないと言うが、艦艇が避難したこの状況下では、それを真に受けるわけにもいかん」

「わかりました。仮にコマンドが上陸してくるにしても、日中の襲撃はないでしょうから、明るいうちに指揮所を立ち上げ、防御陣地ぼうぎょちまも何か所か構築します。ブルドーザーやショベルカーをお借り

してもよろしいでしょうか？」

「もちろんだ。一応、うちの部隊の指揮所や燃料タンクはミサイルをくらつてもそこそこ耐えられるよう、土塁^{どゑい}を完成させている。防御陣地の必要があつたら、隊員ごと回せるだろう。そもそも陸自の施設部隊だ。好きに命じてくれ」

「ありがとうございます。ところでその無人攻撃機ですが、撃退する目処^{めど}はあるんですか？」

姜のこの質問に対し、空将補は渋い顔で首を振った。

「無い無い！ 全く無いよ!! 詳しそうな連中に聞いてみたが、下手をすると一〇〇〇機にもなるんだらう？ 飽和攻撃は、せいぜい数十発、多くても一〇〇発前後のミサイル攻撃しか想定してない。そんな数の敵を叩き落とすのは、物理的に無理だそうだ。米軍さんが、画期的なアイデアをもつてくれればいいが……」

「念のため、パイロットや整備員が立て籠もれるような陣地も構築してください。さほど高い壁を築く必要はありません。アサルトの水平射撃を防ぐ程度で十分だと思います」

「そうするよ。こんなちっぽけな島に、陸海空合わせて一〇〇〇名近い隊員がいるんだ。彼らが一日に消費する物資量を考えただけで、ぞつとするC-2輸送機一機が運んでくる物資では、二日も保たないんだぞ。君らの物資は、どういうルートで運んでいるんだね？」

「われわれは、南アジア^{S_sA_A}条約^T機^O構艦隊^O経由です。今はヘリ空母^{ほうしよう}に本拠地があり、途切れなく物資が届いています。ほんの一個小隊分ですからね」

近くに止まった軽装甲車の運転席から、熊谷の副官が顔を出して、さっさと戻るよう催促していた。

「じゃあ、何かあったらよろしく頼むよ！」

「了解しました。あと、ドライバーに伝えてください。穴に落ちるな、と」

爆撃でできた巨大な穴がそこら中であつて、今は水が張っている。事実上、ゼロ・メートル地帯のためその水が引くことはなく、パッと見たところでは、ただの水溜まりにしか見えない。

だが、深い穴は五メートルを越える。すでに二度、車両が落ちて水没していた。

今は艦艇部隊から浮き輪をかき集めて、その穴に投げ入れていた。そこが爆撃跡であることを示すと同時に、いざ人が落ちても、その浮き輪で助かるようにだ。

熊谷が軽装甲車で走り去っていくと「どうもピシとこないわね……」と姜はぼやく。

「コマンドの襲撃なんて、あると思う？」と、集まった部下たちに聞いた。

「空からは無理でしょうね。仮に空挺降下できたとしても、まず輸送機が上空まで無事に辿り着くという状況が考えられない」

部隊のナンバー2、バレルこと漆原武富曹長うるしばらふとみが言う。

「そうね。潜水艦からの接近上陸は、ゼロとは言えないけど、まあ無いわよね。フィッシュ、この時化では、泳げると思う？」

「潜水すれば可能でしょう。それなりの深さならば、ですが。しかし、島の全周は波消しブロックで覆われています。上陸できる場所は、限られますよ」

水泳の元オリンピック候補だった、体育学校出身のフィッシュこと水野智雄みずのともお一曹いちそうが答えた。

「では、貴方たちが襲撃作戦の立案を命じられたら、どうするかしら？」

「あれを使うしかないでしょうね」

漆原が、港に接岸している漁船団を見遣る。

「……そうよね。脅すなり買収するなり、あるいはベトナム船に偽装して堂々と港に入って上陸するのが、一番安全で確実よね。ひよっとしたら、もうあの中の一隻に潜んでいるかもしれない。誰か、乗船検査くらいしたのかしら？」

「やってないでしょうね。それをやると、われわれがここウッディー島で、主権を行使することになりますから。ベトナム側が、快く思わない」

「では、ベトナム軍からオプザーバーを派遣してもらって、乗船検査するしかないわね。主権の行使だから、ベトナム政府は喜んで応じるでしょう」

港は、島の西端。もともと陸地があつた場所が土地が一番高く、中国軍はそこに施設の中心を置いていた。空自部隊も滑走路から一番離れたその場所にエアドーム製の指揮所や宿泊施設を設けて

いたが、必然的にそこが港から一番近い施設ということになる。

「リベット、この風でドローンは飛ばせるのかしら？」

次に姜は、通信及びシステム管理を担当するリベットこと井伊翔いのかほ一曹に問いかけた。

「無理ですね。スキャン・イーグルならなんとかありますが、空自側から、スキャン・イーグルのような大型のUAVの使用は遠慮してくれと言われてます」

「じゃあ、地上設置型のカメラで港を見張るとして、われわれの指揮所は、どこにでも駆けつけられるよう島中央部に作りましょう。その上で、島の数力所に防御陣地兼、歩哨所を作ります。暗くなる前に全作業を終えましょう。その間も、警戒を怠らないよう。エアコン付きのエアドームテントなんていらないけど、とにかく屋根がほしいわ

ね。これじゃあ、地図一枚も広げられない……。どこかにタープを張ってちょうだいな」

大状況でいろいろ動いている。

米軍はオアフ島奪還作戦がようやく軌道に乗り、中国軍をワイキキビーチに閉じ込めることに成功しつつあった。

香港^{ホンコン}では、若者を核にした独立運動が動きはじめている。

オアフ島占領の報復として敢行^{かんこう}された海南島攻略作戦は、海兵隊が橋頭堡を失ったことで足踏み状態だったが、いずれ挽回^{ばんかい}するだろう。

そして目下の課題は、ロシアが仕掛けてきた無人機による攻撃——それは、3Dプリンターで作られた子供だましのようなちやちやなドローンだったが、大量生産が可能で、大陸を横断する性能をもっていた。それが、小さな空対空ミサイルや、対戦車ミサイルを一発搭載して群れを作る。

そして遠路はるばるロシア領土を飛び立ち、中国大陸を横断し、大編隊を組んで襲撃してくる。

撃墜は可能だったが、とても割には合わない。

たかだか一〇〇機撃墜したところで、次の出撃時には、その数は回復しているのだ。昨夜はその攻撃で、海南島の橋頭堡を潰された。

日米両軍は、指をくわえてその攻撃を見守るしかなかった。ロシアはよほど自信があったらしく、直前にその攻撃を米側に伝えたくらいである。

その攻撃機部隊は、まだ中国領土上空を引き返す途上で、また今夜、再出撃してくるだろう。次の狙いは、沖縄の日米基地だというのが上層部の分析だ。

だが、現状では対抗策は何も無い。

そんな中で、この島の戦略的価値は低下しつつある。中国が、貴重なリソースを割いて今更この島の攻撃に執着するだろうかと思っただが、過去に

動き出した作戦がそのまま展開している可能性も残る。

その襲撃は確実になされるという前提で動けたというのが、ホノルルにいる部隊長からの命令だった。

第一章 価格破壊兵器

イギリスからヘリ空母と一緒に購入したF-35B短距離離陸垂直着陸（V/STOL）戦闘機に乗る村田護人^{むらたもりと}三佐は、ヘリ空母^{ほほうしよ}（六七九九トン）のブリーフィング・ルームで、クラインング・シートに腰を沈めていた。そして、一〇インチのタフパッドで、前夜にALL-エアボーン哨戒機^{シヤマタノオロチ}が撮影した無人攻撃機の赤外線暗視映像を見ている。すでに、二〇回以上は繰り返し再生していた。

味方のエアボーン・レーザーが、向かってくるミサイルを撃破する場面も映っていた。自分はこの時、エアボーン・レーザーのすぐ近くについて、

この機体を守っていたのだ。

相手は、二〇機の編隊だ。その一機の値段は、原付バイクに毛が生えたようなものでしかない。

一〇〇〇機を量産しても、タワーマンション一部の屋分の値段でしかないのだ。

これは、おそろべき価格破壊兵器である。それが一〇〇〇機の束になって飛んでくると、手も足も出ないのだ。

この機体は、二〇機で一つの編隊を構成していた。その九割は射程一〇キロの対戦車ミサイルを一発搭載しているのだが、中に、空対空ミサイルを装備して迎撃機を遠ざける役割の機体も存在

する。それが脅威で、昨夜は攻撃を断念せざるを得なかったのだ。

P-1 哨戒機を改造したエアボーン・レーザーは、そのミサイルも撃墜したが、いかんせんこのエアボーン・レーザーは一機しか存在しない。

この二〇機の価格破壊兵器が、五〇もの編隊になって向かってくると、手の施しようがなかった。隣の椅子に座っていた妹の村田凜子一尉が、「食べる？」とポテトチップスの袋を差し出してくる。

自分たちは、先日までは陸上自衛隊のヘリ・パイロットだった。海上自衛隊がF-35Bの導入を急遽決定した時、陸自から志願して戦闘機乗りになったのだ。ちなみに長兄は、航空自衛隊で唯一のF-35A戦闘機部隊を率いて、トリトン島に展開している。

「これさ、碁盤の目状かと思ったら、そうでもないんだよな。等間隔な編隊じゃないんだ。隣の機

体との距離が狭いとところもあれば、二機分以上の間隔が開いているところもある。編隊は、どういうルールで組まれているんだろうな」

「それって、大事なことなの？」

「そりゃそうだ。俺たちだって、編隊を組む時には、事前に各機の間隔を決めてから飛ぶだろう？ でないと最悪、空中接触する。でも、こいつらはいったいどういうルールで飛んでいるんだ？ そもそも、どうやって僚機との間隔を測っている？ 機首の下側がターレットを装備する構造になっているようだが、それを装備した機体は僅かだ。一つの編隊に、ほんの四機しかない。見たところ、空対空ミサイルを装備した機体はそのターレットはない。すると、他の機体が捕捉した情報を受信してミサイルを撃ったはずだ。安上がりなのに、おそろしくマルチパーポスな機体だ。俺の機体はすぐそばにいたから耳をそばだてていたが、無線

「通信は一切キャッチしていないぞ」

「イメージ・センサーだけで、互いの距離をとっているんじゃないの？ その方が妨害に強いし」

「その程度のシステムで、こんな見事な群制御が可能なのかなあ……」

そう話していると、ハッチが開いて誰かが入ってくるのが見えた。現れたのは、海自でそのエアボーン・レーザーの開発に当たった波多野誠一佐だった。

彼は、テスト・パイロットであり、航空工学の博士号も持つという変わり者だ。本人はパイロット呼ばわりされるより、エンジニア扱いされる方が嬉しそうだが。

「お疲れ様です。トリトン基地に戻らなくてもいいんですか？」

「ああ、ある程度ノウハウができれば、僕がああの機体に乗る必要はないからね。それより、このイ

ナゴの群れの撃退方法を考えるのが先だな」

「あの……たぶん、とつくに検討済みだと思いますが、電磁パルス兵器で、回路を焼き切るのには駄目なんですか？」

物怖じしない凜子が、早速そう聞いた。

「それは、非公式な話だが、実は海兵隊がすでに試したらしいんだよ。前夜、編隊のど真ん中にEMPミサイルを撃ち込んだが、残念ながら、効果は無かった。安上がりな機体だが、それなりの電磁波兵器対策は施されているんだろうね」

「じゃあ、何も対策は無いのでしょうか？」

「現状では、これという切り札はないかな」

「これ、編隊の組み方が結構バラバラですよ？

等間隔じゃない」

次に護人三佐の方が、端末の映像を正面のスクリーンに映しながら言う。

「そうだね。お世辞にも航空ショーに出せるよう

なレベルじゃないが、これはわざとだろう。撃墜する側を惑わすためだな。時間をかけて観察してみると、この群制御の技術は、非常に高度だ」

「一つ疑問なのですが、僚機との間隔の維持や、空対空ミサイルを撃つための搜索は、どうやっているんでしょか」

「それなんだ！ そう密集している編隊でもないが、かと言ってイメージ・スキャナだけで、僚機との間隔をとっているとは思えない。たとえばの話、磁石が入った旅行用などの将棋しやうぎの駒こまがあるだろう。ああいうのをいっぺんに盤面ばんめんにばらまいても、整然と並んでくれるわけじゃない。上下に重なったりもする。だとすると、これらは、何らかの信号をやりとりして、群制御している可能性が高い。しかし、いかなる電波も発信していないことは事実だ。私が自分で開発するにしても、そういう無線電波の発信は控えたいしな。キャッチ

されて存在を露呈させるし、無線をハッキングされる危険もあるからね」

村田兄は、リクライニング・シートに背中を預けて天井を見上げた。パイロットが休めるよう、LED照明の輝度きどは落とされている。

村田兄は、頭上を指さして「LED通信の可能性はないのでしょうか？ われわれも、すでに使っていますし」

昨夜は、LED通信を使って波多野の機体と交信した。現状では至近距離でしか使えないが、逆に遠くまで届かないので、無線傍受に引っかかる心配も無い。

「——なるほど！」

波多野が手を叩き、インターカムを使ってトリトン基地上空を旋回中の「ヤマタノオロチ」に、その場で連絡をとった。

「そういう状況を想定していなかったからデータ

を検証しなかったが、広帯域にわたってLED通信をキャッチして記録している」

「もしそうなら、意外にこの機体、金がかかってますよね……」

「どうだろう。通信距離は、一〇〇〇メートルもあれば間に合う。あとは、情報を各機でリレーするだけだ。たいしたパワーはいらないが、確かに編隊飛行の肝ではあるね」

一〇分後、ヤマタノオロチから返事が届く。大量のデータのやりとりを記録しているが、全てノイズと判定されて埋もれていたとのことだった。

「つまり、こういうことだな。各機が、LED通信で自機の位置や状況を発信し、僚機がそれをキャッチして距離をとる。編隊の中に、どこかに群制御のボスがいるかもしれない。空対空ミサイルも、おそらく一番外側の機体のセンサーが発見した敵の情報を発信し、編隊の内側から撃っている

んだらう。いやあ、これは高度だな。いってみれば、F-35戦闘機のセンサーフュージョンで得た敵情報を後方へ送り、そのデータを元に、F-15戦闘機が長射程ミサイルを発射するようなものだ。われわれが、べらぼうなコストをかけて築き上げた最新鋭の攻撃方法を、ネットで買えるパーツでやってのけている」

「お役に立ちましたか？」

「もちろんだよ！ 詳しく分析してみないとはっきりしたことは言えないが、この信号は、ある種の敵味方識別装置^Iも兼ねているはずだ。でないとなら、発射された空対空ミサイルが味方を攻撃するおそれだつてあるからね。IFF^Fというのは、実はパイロット諸君が考えているほど解読不能な暗号が使われているわけではない。警察のデジタル無線と同レベルだと言っているいいんだ。それを解読し、われわれが同じものを発信できれば、編隊の中に

安全に紛れ込める。それができれば、大きな前進だ！ ありがとう、村田君。やはりここに残ってよかった！ 色々な人と議論すれば、道は拓ける。早速、アメリカ側に情報を提供しよう」

「しかし、LED通信システムを装備した機体はまだ限られますよ。うちでは、F-35だけだし」「うん。それも考えよう！ きっとこれが突破口になるよ」

波多野は兄妹へ感謝の握手を求めると、軽やかな足取りで部屋を出ていった。

静かになった部屋で「……間に合うかな」と兄が呟くと「問題はそこよね」と妹が応じる。

攻撃機部隊は間もなくロシア領土内の各基地に帰還し、燃料と武器の補給を受けてまた飛び立つだろう。

沖繩が襲撃を受けるまで、一二時間はかかるはずだが、いずれにせよそれは夜明け前には敢行さ

れる。

LED通信の内容を解析し、乗っ取りなり成りすましなりの方法を探り出して実行するだけの時間が、十分にあるとは思えなかった。

その頃、村田家長男で第二〇二飛行隊隊長の村田先斗二佐は、ほうしょうの司令公室にいた。昨夜の事態を受けての海自との協議のために、トリトン基地からオスプレイで飛んできたのだ。

海自側は、連合艦隊司令長官の五味勇美海将と、ほうしょう搭載のF-35B部隊を率いる藤原美沙二佐が出迎えた。五味もP-3C乗りでウイングマークをもっている。

「ほら、士官公室とかで話しをすると、何か日本人同士が固まって謀議でも図っているように思われるだろう。一応、米軍人にも自由に使ってくれと言っている手前、外してくれとは言えないから

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。